

# 世界図に見る「天竺」認識に関する一考察

## —16世紀末～18世紀初頭の日本を中心として—

石崎 貴比古

### 目次

0. はじめに
1. 地図に見る三国世界観
2. 天竺が存在しない世界図
3. 天竺とインドが無関係な世界図
4. 天竺とインドの結合
5. 日本初の刊行世界地図と天竺の「復活」
6. おわりに

### 0. はじめに

本稿は近世日本の世界図における「天竺」の表現を検討し、その変化の過程を辿ることにより日本人の異国認識の一端を明らかにすることを目的とする。中世から近世初期までの日本人の世界観は「三国世界観」であったと言われる。これは世界が本朝（日本）、震旦（中国）、天竺という三国から成り立っているとする世界認識の枠組みである。ポルトガル人の来航に端を発してヨーロッパにおける最新の地理学的情報が流入し始めることで、この世界観は大きく変容することになった。このような新しい情報の流入によって、人々は世界を垂細垂・欧羅巴・利未垂（アフリカ）・垂墨利加・墨瓦蠟泥加（未知の南方の大陸）の五大州によって成り立っていると認識するようになっていくのである<sup>1</sup>。この五大州による新しい世界認識は、長崎の町人学者として有名な西川如見が18世紀の初頭に著した『増補華夷通商考』などの地理書で具体的に記されている。

ところで、三国世界観の中で天竺という言葉は、「インドの古い名称」と説明される<sup>2</sup>。確かに仏教

の祖国である天竺として日本人が想起し続けてきた場所は、今日の日本においてインドと呼ばれていることは間違いない。その意味で天竺という旧称は一見すると、インドという新たな名称に取って代わられたかのように見える。しかし、世界図に記された天竺の表現を歴史的に辿ってみると、このような理解が実情とは若干異なることが分かる。つまり、現在インドと呼ばれている場所に対する天竺という古い名称が、インドという新たな名称に変化したのではなく、日本人が天竺として認識していた場所が、次第に現在我々がインドと呼ぶ場所へと同定されていったというのが、より実情に即した理解だと考えられる。

ただし、本稿の目的は天竺という歴史用語そのものに関する正確な理解を追求することだけにあるわけではない。天竺という概念は、誕生以来、「仏教と釈迦の祖国」という意味合いで繰り返し使用されるようになり、さらには三国世界観の中で本朝、震旦以外の世界すべてを包括するような広大で茫漠としたものとして変化し続けてきた。三国世界観における震旦が天竺とは異なり、物理的な交渉のある実体としての他国であったのに対して、天竺は非現実的な情報をも含んだ「異国そのもの」であったと言っても過言ではない。その意味で天竺に対する認識の歴史的な変化を論じることは、日本人にとっての異国観、外国観、世界観そのものの歴史にも大きく関係するものと思われる。

以上のことを論じるために、本稿では江戸時代の日本人が参照したり、刊行したりした地図のいくつかを時代を追って検討する。なお、本稿の考察対象とする地図は16世紀末から18世紀初頭を主たる範囲としており、現在知られている世界図のごく一部である。そのため、あくまで天竺認識の変化を大まかに辿る道筋としての報告であるこ

<sup>1</sup> このような近世の対外観あるいは対外認識の変化については数多くの論稿があるため、代表的なものを以下に挙げる。荒野泰典「近世の対外観」朝尾直弘ほか編『岩波講座 日本通史 13 近世 3』（岩波書店、1994年）、213-249頁。荒野泰典「天竺の行方—三国世界観の解体と天竺—」木村尚三郎ほか編『中世史講座 11 巻 中世における地域・民族の交流』（学生社、1996年）、44-96頁。

<sup>2</sup> 例えば『広辞苑』第五版（岩波書店、1998年）では以下のように説明される。①日本および中国で、インドの古称。②ヨーロッパ人が渡来して以後、ある語にそえて、

外国・遠隔地・舶来の意に用いた語。③天竺木綿の略。④「唐（から）過ぎる」をもじって、「辛すぎる」の意に用いる。このうち本稿で問題とするのは①の意味である。

とをお断りしたい。

## 1. 地図に見る三国世界観

江戸時代の世界図を検討する前に、中世以来の三国世界観が見られる地図を確認しておきたい。その一例が我が国最古の世界図とされる「五天竺図」である。「五天竺図」は法隆寺に甲本、乙本、丙本の3種が所蔵され、このうち甲本が最も古い(図1)<sup>3</sup>。この図は僧侶の重懐が1364年(貞治3)に描いたものとされ、大きさは縦176.6センチメートル、横166.8センチメートルに及ぶ<sup>4</sup>。その源流は唐宋時代の間に中国で作られ、おそらく朝鮮を経由して日本に伝来したものと考えられている<sup>5</sup>。「五天竺図」は一般に「仏教系世界図」と総称される世界図の系統に位置づけられ、5世紀にインドで成立した世親の『阿毘達磨俱舍論(俱舍論)』に見られる仏教的な世界観に従って世界を描いている。『俱舍論』において全宇宙は、須弥山を中心として、東勝神州、南瞻部州(=南閻浮提)、西牛貨州、北俱盧州から構成され、人間の住む世界は南瞻部州とされている。南瞻部州はインド亜大陸が表象されたものであり、北側に広く南側に狭い逆三角形の地形として描かれる。「五天竺図」でも同様の地形が図全体のほとんどを占める大きさで描かれ、図の右側に「南瞻部州」との地名が短冊状の枠内に記されている。図そのものには記されていないが、この図は16世紀頃から「天竺図」と呼ばれたようで、今日では「五天竺図」というのが一般的な名称として定着している。

本来、仏教的世界観には、中国人から見たインドの呼称である天竺という地理的概念は存在しない。しかし、「五天竺図」には北天竺、東天竺、南天竺、西天竺、そして中天竺という五つの天竺の名称が各所に記されており、それぞれの区域が曲線によって区切られている。五天竺とは本来、古代インドの地理区分に淵源を持つ概念である。こ

の五天竺の名称が記載されているのは、「五天竺図」には玄奘に代表される仏僧など、東西を往来した人々がもたらした地理的情報を取り込まれているからだと考えられる。五天竺の概念は玄奘の『大唐西域記』に記されているがごとく、古代から中世にかけて日本にも伝わり、天竺を語る際に一般的に用いられる言葉として定着したと考えられる。

これら五天竺の名称とは別に「五天竺図」には、摩揭陀国、舍衛国、吐蕃国、大雪山、補陀落山など細かな名称も記されている。これらの地名は玄奘が『大唐西域記』において滞在したり通過したり、彼が聞いたことのある国や地形の名称とされる。また、玄奘が天竺を往復した路程が朱色の線で記されており、そもそもこの路程こそが「五天竺図」の主題だと考えられている<sup>6</sup>。また、このことを裏付けるように、卵形の天竺の外側には全部で19枚の色紙が張られ、題名らしき「南瞻部州」と書かれた色紙のほかは大部分が『大唐西域記』の第1巻、第2から抜粋した文章が記されている。その内容は「印度」の名称、建築と住民の習慣などといったものである<sup>7</sup>。

「五天竺図」は五天竺の名称が記された南瞻部州が中央に大きく描かれ、北東の端に中国が「晨(震)旦」と記され、「大唐国」との文字が小さく付されている。さらに東北に「秋津嶋」「九国(九州)」「四国」などの名称により、日本も描き込まれている。このように日本、中国、天竺の三国が記されるために、五天竺図は三国世界観や天竺への思慕、末法辺土意識といった中世における日本人の世界観の特徴が見られるとされている<sup>8</sup>。しかしながら三国と言っても世界が均等に三分割されているわけではなく、世界の大部分を占めているのはあくまで巨大な南瞻部州と、そこに描き込まれた五天竺である。つまりこの図における主題はあくまで天竺が大部分を占める仏教的世界・南瞻部州であり、その中に中国や日本を位置付けることで三国が表現されているのである<sup>9</sup>。

<sup>3</sup> 法隆寺では甲、乙、丙本をそれぞれ整理番号256、255、254としている。

<sup>4</sup> ジャメンツ・マイケル「法隆寺所蔵『五天竺図』についての覚え書き」藤井謙治ほか編『大地の肖像 絵図・地図が語る世界』(京都大学学術出版会、2007年)、84-103頁。丙本、乙本は大きさが若干異なり、いずれも江戸時代に模写されたものと考えられている。

<sup>5</sup> 室賀信夫・海野一隆「日本に行われた仏教系世界図について」地理学史研究会編『地理学史研究 第一集』(臨川書店、1979年)、69-141頁。

<sup>6</sup> 室賀信夫・海野一隆「日本に行われた仏教的世界図について」、78頁。

<sup>7</sup> ジャメンツ・マイケル「法隆寺所蔵『五天竺図』についての覚え書き」、90頁。

<sup>8</sup> 応地利明『絵地図の世界像』(岩波書店、1996年)。なお、仏教的世界観に関しては定方晟『インド宇宙誌』(春秋社、1985年)に詳しい。

<sup>9</sup> 応地利明『絵地図の世界像』、141頁。

この「五天竺図」自体が、中世から近世にかけての一般的な日本人の世界観を表現していると言いつけることは難しいが、少なくとも仏僧や仏書を読み得る知識人にある程度共有されたイメージとして参考にすることは可能だろう。また、「五天竺図」をはじめとした仏教系世界図が数多く描かれていたことから考え合わせれば、このようなイメージが庶民にも共有されていたことは想像に難くないと考える。

## 2. 天竺が存在しない世界図

このような三国世界観が大きく変容するきっかけとなった最初の出来事は、当時の人々から「南蛮人」と呼ばれたポルトガル人との出会いであったと考えられる。というのは彼らが、ヨーロッパで作成された当時としては最先端の世界図を日本にもたらしたからである。残念ながら 16 世紀の後半に彼らもたらした世界図そのものは管見の限り今日まで確認されていない。しかし、当時の日本人が見たであろうことが史料から確認できるのがアントワープの地図製作者アブラハム・オルテリウス(1527~1598)による史上初の世界地図帳『世界の舞台』(Theatrum Orbis Terrarum、1570年初版)で、天正遣欧使節が持ち帰ったとされている。

デ・サンデ(1531-1600)の『天正遣欧使節記』によると 1585 年 4 月に法王の謁見を済ませて北イタリア諸都市に赴いた使節の一行が、7 月にパドヴァでドイツ人植物学者メルヒオル・ギランディヌスから 4 冊の豪華本を送られる場面が記されている<sup>10</sup>。そのうちの第 1 冊に「世界輿地図(Theatrum Orbis)」が収録されており、これが『世界の舞台』であるとされる。また別のイエズス会士であるダニエロ・バルトリも同様の記述をしており、一行がこれを日本に持ち帰ったこともほぼ明らかである<sup>11</sup>。

『世界の舞台』に収録される地図は主に 1560 年代に作成されたものと考えられており、当時としては最先端の地理学の結晶である。『世界の舞台』は初版後各国で 41 版翻訳され、2200 部が売られて中国にも伝わり、後述する南蛮世界図屏風やマテオ・リッチの『坤輿万国全図』にも影響したとも言われる。

そして、これらの地図を通じて間接的に日本人の世界認識にも影響を与え、幕末まで広く流布して一般的な世界知識の基準になった<sup>12</sup>。

『世界の舞台』においてインド亜大陸が描出される地図は 3 枚収録されている。

1 つは「世界全図(TYPVS ORBIS TERRARVM)」である(図 2)。ゲラルドゥス・メルカトル(1512~1594)が 1569 年に作成した世界図を基本にしたとされ、その名の通り世界全域を描いている。地図帳冒頭の説明文でオルテリウス自身が述べているように、後に五大州と呼ばれるようになる世界区分が見られ、ASIA、AFRICA、EVROPA、AMERICA、そして TERRA AVSTRARIS NONDVM COGNITA の文字がそれぞれの大陸に大きく記載されている。インド亜大陸は実際よりもやや扁平な逆三角形で描かれており、北部から東南アジアまで横断する形で大きく India orientalis と記され、その他にも Delli、Orixa、Goa などと言った地名が記載されている。

2 枚目は「アジア新図(ASIAE NOVA DESCRIPTIQ)」であり、ジャコモ・ガスタルディ(1500~1565)による 1559~61 年に刊行されたアジア図を踏襲したものとされる。こちらはインド東部、ベンガル湾あたりを東西の中心とし、アラビア半島から東南アジア島嶼部までを拡大して描いた地域図である。インド亜大陸北部には後述する「アジア図」と同様に INDOSTAN と記されており、さらに India Intra Gangem との記述がある。これはプトレマイオス以来踏襲されてきたインドの区分の方法で、ヨーロッパ世界から見てガンジス川よりも内側すなわち西側の呼称である。一方の外側・東側は India Extra Gangem と呼ばれ、「野蛮の地」と考えられていた<sup>13</sup>。

3 枚目は「インド図(INDIAE ORIENTALIS INSVLARVMQVE ADIACIENTIVM TYPVS)」である。こちらは中国東岸あたりを中心とし、西はペルシャ、東は太平洋の中央あたりまでを描いた地域図で、先の「世界全図」よりもインド亜大陸はやや細長く描出されている。こちらの場合には亜大陸東北部に INDOSTAN との記述があり、やはり

<sup>12</sup> 船越昭生『ライデン大学図書館蔵 オルテリウス『世界地図帳』別冊解説』(臨川書店、1991年)。

<sup>13</sup> 重松伸司「インドの名称と概念 変容を続けてきた『インド』という名前」重松伸司ほか編『インドを知るための 50 章 エリア・スタディーズ』(明石書店、2003年)、15-18 頁。

<sup>10</sup> 泉井久之助訳「対話二十九」『デ・サンデ天正遣欧使節記(新異国叢書 5)』(雄松堂書店、1969年)、547-548 頁。

<sup>11</sup> 「天正十年是歳」『大日本史料 第十一編別巻之二 天正遣欧使節関係史料二』(東京大学、1961年)、313 頁。

DELLI、ORIXA といった細かな地名が数多く記されている。

このように『世界の舞台』に収録されたいずれの地図においても地名はアルファベットで表記されており、当然ながら天竺という語はどこにも存在しない。インド亜大陸に記されていた、INDOSTAN、DELLI、ORIXA などといった地名は、当時の日本人にとっては未知であったと思われる名称ばかりであった。

### 3. 天竺とインドが無関係な世界図

このように西洋で作成され、舶載されたと思われる世界図を元に日本においても世界図が描かれるようになる<sup>14</sup>。その最初期のものが南蛮世界図屏風あるいは南蛮屏風世界図、南蛮系世界図などと呼ばれる屏風に描かれた地図であり、20点ほどが現存している<sup>15</sup>。

これらの世界図は1枚の原図からすべてが作成されたわけではなく前後関係についても諸説あるが、最も初期のものとして大方の見解が一致しているものが、堺市の山本久氏の所蔵品（以下「山本氏図」）である（図3・現在は京都国立博物館に寄託）。

山本氏図は六曲から構成され、全体で縦135.5センチメートル、横269.5センチメートルの大きさになる。卵形図法によって大西洋を中心に描かれており、他の南蛮世界図屏風と同様に赤道と南北の回帰線、極圏を除く経緯線が省略されている。記載される地名は、漢字で記されたわずかな例外を除けば、ほとんどがラテン語の欧文地名が平仮名で記されたもののため、ポルトガル・スペイン

系統の知識によっているものと考えられる<sup>16</sup>。図中にポルトガル船とスペイン船の航路が往復を区別して記されており、このこともこの図が両国系統の知識による可能性を補強する。製作年代は明らかではないものの、秀吉の文禄の役によって得られた地理的知識「おらんかい」の名称が記載されていることから1592～93年以降に描かれたものと考えられている。また、オランダの植民地であるバタヴィアが記されていないことから1619年にオランダ東インド会社がバタヴィアを領有するより以前の世界が描かれている。

図中には他の南蛮世界図屏風に比して多くの地名が記載されている。インド亜大陸は現在用いられる世界地図とほぼ似たような形で描出されており、「なんぼん」との地名が記されている。一方、天竺は「てんぢく」という平仮名表記で東南アジア、特に現在のタイ付近に記されている。以下、「山本氏図」に記載されたインド亜大陸、東南アジア地域の地名を検討する。

#### 【天竺／てんぢく①】

まず、「てんぢく」である。先述の通り、山本氏図において「てんぢく」はインド亜大陸ではなく、インドシナ半島の中央部に記されている。この他、東南アジア大陸部には「ちゃんば」（チャンパ／占城）、「かほうちゃ」（カンボジア／柬埔寨）、「まるか」（マラッカ）などが記されている。これらの国々はいずれも同時代の西洋製世界地図に記載されることが多い地名であり、例えば先に見たオルテリウス『世界の舞台』の「インド図」ではそれぞれCAMPA、CAMBOIA（ママ）、MALACAなどと記されている。一方、同時代の地図で、現在のタイ付近にSIAM、SIANなどと記載されていることの多いシャム・シャムロ／暹羅の文字が見当たらない。むしろ、「かほうちゃ」、「ちゃんば」との位置関係から考えても、「てんぢく」の文字がシャムの場所に記載されており、シャムを「てんぢく」と認識していたことが分かる。

それでは何故当時の人々が数ある地域の中でシャム、あるいは現在のタイ付近を「てんぢく」の名を冠する場所として選んだのであろうか。

時代はやや下るが、朱印船を中心とした活動に

<sup>14</sup> 日本における最初期の世界地図製作については、イエズス会宣教師が関与したであろうことが指摘されている。相原良一「アジアにおけるイエズス会の地図制作と南蛮屏風世界図の南大陸」キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』第19輯（吉川弘文館、1979年）、201-237頁。

<sup>15</sup> 南蛮世界図屏風については中村拓「南蛮屏風世界図の研究」キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』第9輯（吉川弘文館、1964年）、1-273頁。秋岡武次郎「桃山時代の四世界図屏風について」『人文地理』7巻6号（1956年）、421-432頁。海野一隆「南蛮系世界図の系統分類」『東西地図文化交流史研究』（清文堂出版、2003年）、117-175頁など先学が古くから系統分類を試みている。近年では川村博忠『近世日本の世界像』（ペリかん社、2003年）によるまとまった分類が提唱されており、本稿では基本的にこの分類を踏襲して論を進める。

<sup>16</sup> 織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成世界図編解説』（講談社、1975年）。

よって東南アジア海域へ進出した日本人は、この地域を天竺、あるいは天竺の一部として考えていた。例えば有名な山田長政が1626年(寛永3)に静岡市葵区の静岡浅間神社に奉納したとされる絵馬にはこのように記されている<sup>17</sup>。

### 【史料 1】

奉挂御立願

諸願成就

令満之所当国生

今天竺暹羅国住居

寛永三丙寅歳二月吉日

山田仁左衛門尉長政<sup>18</sup>

(傍点は筆者による)

この絵馬の記述を一見すると、長政には「天竺暹羅国」に居住しているとの自覚があるように思われる。仮に長政が架空の人物で、この絵馬も長政に仮託した何者かが記したのだとしても、長政が「天竺暹羅国」に居住していた人物として想起されていたことは間違いないと思われる。一方、1700年頃に長政の事績を記した「暹羅国山田氏興亡記」には「於暹羅国山田仁左衛門立身之事」として次のような記述がある。

### 【史料 2】

天竺国ハ、甚大国而、東西南北中央ト五郡ニ分テ、其一郡ノ内ニモ亦数部有テ、大国相分テ、一国二国又ハ十ヶ国二十ヶ国ニ分テ国王タル者多シ。暹羅国ハ其内ノ大国也。中華ノ西南、交趾(コウチ)国、占城(チャンパ)国、柬埔寨(カンボチャ)ヲ経テ行所也。日本ヲ去ル海上二千余里(但三十六丁ヲ以テツモリタル詞也)南天竺ノ東南ニ有ルノ国也東ハ柬埔寨国ニ隣リ、西ハ弁喝喇(ベンカ

ラ)海ト云フ大入海ノ隔テ、向ハ孟留(モウル)国ニテ是モ南天竺ノ内ナリ<sup>19</sup>。

ここにおいて、「天竺国」は「甚大国」で、「東西南北中央」の五郡に分かれ、そのうち一郡の中にも数部があり、さらに「十ヶ国二十ヶ国」に分かれる場合があると説明される。また「暹羅国」は「其内ノ大国也」とあり「天竺国」の中の一部として説明され、また「南天竺国の東南」と位置付けられている。さらにこの史料は同地へ商人が往来していること、日本人が移住し日本町を形成していることが説明される。つまりこの史料において、日本人は天竺国と商売を通じて往来があり、また少なくない数の日本人が天竺に移住し、定住していたと認識しているのである。

また、このような表現から天竺は暹羅国の上位概念として想起されており、一つの国というよりも、数か国を包括していることが分かる。このような考え方はその後の一般的な認識になったと見られ、例えば冒頭にも触れた西川如見の『増補華夷通商考』や、その種本とされる『異国風土記』などにおいては、暹羅だけでなく占城、柬埔寨、太泥、六甲、などの国々が、「南天竺の内」として記されている<sup>20</sup>。

天竺という概念が実際に東南アジアのどの程度まで包括し得るのかはこの語が用いられる文献によって異なる。しかし如見の『増補華夷通商考』の成立過程と天竺の語の使用法を検討すると、時代が下るにつれて、天竺が包括する地理的な範囲は拡大しているように思われる<sup>21</sup>。

当時の日本人がシャムとはどのような国だと考えていたかを示す史料として先に引用した「暹羅国山田氏興亡記」の別の記述が参考になる。「暹羅国山田氏興亡記」は崩御した暹羅国王の葬礼の厳

<sup>17</sup> 山田長政については矢野暢が『山田長政』はいなかった『中央公論』(1987年5月)、228-238頁を著し、いわゆる戦時中の南洋史観において誇大化された彼の事績について疑義を投げかけている。本稿では同氏の意見に注意を払いつつ、山田長政が何を成したかではなく「どのような場所で、何をなした人物として人々に目されていたか」という点を重要視し、その実在性については問わないこととする。

<sup>18</sup> 「暹羅国山田氏興亡記」山田長政顕彰会編『山田長政資料集成』(山田長政顕彰会、1974年)、48頁より引用。また、岩生成一『鎖国』日本の歴史14(中央公論社、1974年)などに絵馬の写真が掲載されている。

<sup>19</sup> 「暹羅国山田氏興亡記」山田長政顕彰会編『山田長政資料集成』(山田長政顕彰会、1974年)、37頁。上述した矢野の研究等により本史料の信頼性には疑義が投げかけられている。本稿ではそれを踏まえた上で、長政と天竺のイメージを語ったものとして扱うこととする。

<sup>20</sup> 石崎貴比古「西川如見のインド認識—三国世界観から五大州へ—」『印度學仏教學研究』59(1)、(日本印度学仏教学会、2010年12月)、502-499頁。

<sup>21</sup> Takahiko Ishizaki, A representation of India in the early Edo period of Japan. Consortium for Asian and African Studies (CAAS) Making a Difference: Representing/Constructing the Other in Asian/ African Media, Cinema and Languages Proceedings of the Papers. 2012.

肅さを記し、以下のように記している。

#### 【史料 3】

斯テ葬礼ノ儀式ヲ調べ、菩提所久留園精舎ニ送テ重ク葬リ奉リ、其式様ニ日本ニ見馴ザル殊勝ナル事ドモ多シ。誠ニ仏在世ノ生国タル故ナルベシト日本人モ感ジケル<sup>22</sup>。

すなわち「仏在世ノ生国」ということは釈迦が生誕した場所としての天竺を想起していると言える。当時の日本人にとって「天竺」とはあくまで釈迦の生誕の地、そして仏教の誕生の地として認識されていた。つまり山田長政は仏教の支配する国、あるいは仏教的聖地で活躍していたと認識されていると言えよう。以上のことから暹羅が、仏教が隆盛している国と認識されたため、仏教の国＝天竺の中の大国として同定されたのだと考えられる。

さらに、当時の日本において天竺と、そのうちの大国と目された暹羅が同一視される場合もあったことをルイス・フロイスが 1550 年（天文 19）に記している。

#### 【史料 4】

筑前国の博多の市は、住民が皆商人で、上品であり人口が多いが、司祭はその市に来た時に、禪宗の僧侶の非常に大きい某寺院を訪れた。彼らは現世以外は何ものも存在しないと信じており、公然と多くの男児をかかえ、なんら恥じることなく彼らと例の自然に反する汚らわしい罪悪に耽っていた。その仏僧たちは、司祭（フランシスコ）が、彼らの偽りの神々の出身地である天竺、すなわちシヤム国から来た人であるかのように思い、司祭に会って、ともに語らうことを喜んだ<sup>23</sup>（傍線は引用者）。

#### 【史料 5】

司祭は一人の身分の高い貴人に対し、自分が国主の前に罷り出られるように、そしてさらに自分が説く教えを聞いた後、（国主）がその国で布教する許可を与えてくれるように国主に働きかけてもらいたいと懇情した。そしてこの（貴人）が国主に、

かの人物（フランシスコ）は、天竺、すなわち仏の出身地であるシヤムから来た者だと告げると、（国主）はその人に会ってみたい、と言った。（中略）

国主は上機嫌で彼らと語り、彼らの（日本までの）航海やインドならびにヨーロッパのことについて幾つかのことを質問した後に、彼らが自領で説きたがっている新しい教義についてどのようなことを言（おうとするの）か聞きたがった<sup>24</sup>（傍線は引用者）。

この記述から、国主、すなわち大内義隆がザビエルらに謁見を許したのは、彼らが「天竺＝シヤム」から来た人々だからだと言える。一方興味深いことにフロイスは天竺とシヤムについて記した直後にインドについて言及している。義隆はザビエルらにインドならびにヨーロッパのことを質問したと記されているが、この際の「インド」が、天竺と本来同義であることを義隆はもちろんザビエル自身も気づいていなかったのではないだろうか。ヨーロッパ世界におけるインドとは、ヘロドトスやアレクサンドロス以来 16～17 世紀に到るまで「東方の極致」であり、「異様な怪物が跋扈する世界の涯ての地」として認識されていた<sup>25</sup>。そしてイエズス会宣教師たちがインドの地を踏んだのは、既に仏教が滅んで長い時を経た後であった。そのため日本人が奉じる仏教や、その教えが生まれたという天竺という場所が、彼らの呼ぶインドであると認識するまでには相当な時間を要したのではないだろうか<sup>26</sup>。つまり、天竺とは最初からインドやシヤムを漠然と指していたのではなく、あくまで仏教・釈迦の誕生の地であったのであり、それが現在のインドであるということは誰も即座には知り得なかったのだと考える。

このようにポルトガル人宣教師たちは彼ら自身が天竺人と呼ばれていることに気付いた。例えばザビエルは「大内義隆記」において「天竺仁」として記されていることがこれまでも指摘されてい

<sup>24</sup> 同上、54-55 頁。

<sup>25</sup> 彌永信美「他者としてのインド」『現代思想』22-7（青土社、1994 年 6 月）、172-186 頁。

<sup>26</sup> チャールズ・アレンによれば仏教の起源がインドにあることをヨーロッパ人が初めて認識するようになったのは 19 世紀初頭のことだという。Charles Allen, *The Buddha and the Sahibs: The men who discovered India's lost religion.* (John Murray, 2002).

<sup>22</sup> 「暹羅国山田氏興亡記」山田長政顕彰会編『山田長政資料集成』（山田長政顕彰会、1974 年）、39 頁。

<sup>23</sup> フロイス著、松田毅一ほか訳『日本史 6』（中央公論社、1978 年）、52 頁。

る<sup>27</sup>。

#### 【史料 6】

都督在世ノ間ヨリ。石見ノ國大田ノ郡ニハ銀山ノ出来ツヽ寶ノ山トナリケレバ。異朝ヨリハ是ヲ聞。唐土。天竺。高麗ノ船ヲ数々渡シツツ。天竺仁ノ送物様々ノ其中ニ。十二時ヲ司ルニ夜ル昼ノ長短ヲチガヘズ響鐘ノ声ト十三ノ琴ノ糸ヒカザルニ五調子十二調子ヲ吟ズルト老眼ノアザヤカニミユル鏡ノカゲナレバ。程遠ケレドモクモリナキ鏡モ二面候ヘバ。カトル不思議ノ重宝ヲ五サマ送ケルトカヤ<sup>28</sup>（傍線は引用者）。

山口には「異朝」であるところの唐土、天竺、高麗から多くの船が来航していることが記されており、そのうちの天竺から来た人物すなわち「天竺仁」が義隆に呈した贈り物の品々が挙げられている。異朝とは「本朝」あるいは「我が朝」と対置されるものと考えられるため、天竺とは当時の人々にとって自分たちが住んでいるのとは異なる場所であり、なおかつ唐土でも高麗でもない地域として認識されていたことが分かる。また、天竺仁（人）と呼ばれたのはザビエルに限ったことではなく、イエズス会の宣教師全般がそのように呼ばれたらしいことはコスメ・デ・トルレスからザビエルにあてた手紙などによっても分かる。

#### 【史料 7】

九月二十八日（○天文二十年八月二十八日。）私達の所持品を隠したあとで、私はアントニオ（○元アンジローの下僕。）を私達の友人の一人であるカトジドノ（○シュールハマー師によると、内藤殿Naitondonoの誤記という。大内義隆の重臣内藤興盛と思われる。）の屋敷に遣わし、私達がどのようにすべきかについて助言をしてくれるよう求めました。アントニオはそこから走って戻り、彼が急いで私達を呼び寄せたことを伝えました。その途中で、私達は頭から足まで武装して弓矢や槍を持って戦いの準備をした多数の軍隊に出会いましたが、彼らは私達をチェンジクス（○天竺人。）と呼び、彼等（○トルレスらを指す。）が仏の悪口

を言ったために戦争が起こったので、私達を殺しこの地から逐い出すべきだと言いました<sup>29</sup>（ふりがな、括弧内も原文のまま引用）。

このように彼らは日本人たちにとって全く未知の世界から来た人々だったため、三国世界観における日本と中国以外の世界、つまり天竺から来た人々とされ、彼らもまた天竺人と呼ばれたのだと考えられる<sup>30</sup>。天竺は釈迦や仏教の祖国であるとともに、三国世界観に於いては世界の大部分を占める大国であったため、日本や中国以外の国々を包括し得る概念だったと言えるだろう。ところが天竺が地図上のどこにあるのか、という問題に直面した際に当時の日本人はタイ付近を選んだのである。

#### 【いんぢあ・へんから】

インド亜大陸のうち、現在のデリー付近に記される「いんぢあ」は India を平仮名表記にしたものと思われる。先に見たオルテリウス『世界の舞台』の「アジア図」では India Intra Gangem、同じく「世界全図」では India Orientalis といずれにおいても India の語が見られる。山本氏図の作者が参照した世界地図に Gangem や Orientalis の文字があったのかどうかは定かではないが、いずれにせよ上記2種類と近い世界図におけるインド亜大陸の記述をもとに、同亜大陸北西部、インダス川と思しき大河の東側に「いんぢあ」が記載されるに至ったものだと考えられる。

当時の人々にとって天竺と「いんぢあ」が同根のものだとは全く理解されていなかったのだと思われる。『大唐西域記』などの仏典で天竺と、漢字で表記された「印度」は同一の場所であることが

<sup>29</sup> 「1551年10月20日（天文二十年九月二十一日）付、山口発、コスメ・デ・トルレスの豊後にあるフランシスコ・ザビエル宛書翰」東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集譯文之一 下』（東京大学出版会、1994年）、23頁。

<sup>30</sup> イエズス会宣教師たちが天竺人と呼ばれたのには、彼らがキリスト教という宗教に関わる人々であった点とも関わりがあると思われる。当時キリスト教は「天竺宗」と呼ばれることがあり、仏教の一派のような形でとらえた人々も多かったようである。鉄砲をもたらした一行が南蛮人とされ、宣教師たちが南蛮人とともに天竺人の名称でも呼ばれたことがそれを暗示しているように思われる。この点についての詳しい検討は別稿に譲りたい。

<sup>27</sup> 清水紘一『日欧交渉の起源』（岩田書院、2008年）。

<sup>28</sup> 「大内義隆記」『群書類従』第21輯（続群書類従刊行会、1955年）、411頁。

明示されていたが<sup>31</sup>、ここに登場する「いんぢあ」が印度と同義であることはまだ理解されておらず、それゆえに天竺と別個に表記されることになったと考えられる。

また山本氏図の別の部分に目を転じると、インド亜大陸東部には「へんから」という地名が記載され、これはベンガルを意味する。『世界の舞台』に記されているように16世紀後半の西洋製世界地図におけるベンガルは *Bengala* あるいは *Golfo de Bengala* といった地名が記されており、これを平仮名で音写したものと考えられる。

#### 4. 天竺とインドの結合

このように西洋に起源する知識に基づいた新しい世界図が日本でも作成され始めた初期において、天竺はインド亜大陸とは無関係な時代があったことが明らかになった。その後17世紀に入ると日本人の世界認識に大きな影響を与えた世界図が登場する。イタリア人のイエズス会宣教師マテオ・リッチ(1552～1610)が1602年に初版を北京で出版した『坤輿万国全図』である。マテオ・リッチはヴァリニャーノの命によって1583年に中国布教へ赴き、彼の地でいくつかの世界地図を作成した<sup>32</sup>。このうち『坤輿万国全図』が最も有名であるが、同図は早い段階で日本へ舶来したと考えられ、日本人の世界認識に大きな影響を与えたことで知られている。

『坤輿万国全図』は木版刷六幅から成っており、全体で縦約1.8メートル、横約4メートルにも及ぶ。世界全体の描出方法は卵形あるいは楕円形の輪郭によっており、16世紀ドイツのアピアヌスが最初に採用した方法と同様である。経線は福島(カナリア諸島)の170度を起点にしているが、画面

<sup>31</sup> 『大唐西域記』巻第二には「詳夫天竺之稱。異議糾紛。舊云身毒。或曰賢豆。今從正音。宜云印度。」とある。水谷真成訳注『大唐西域記1』(平凡社、1999年)、151-152頁。

<sup>32</sup> マテオ・リッチによる世界図の版本はいくつかある。1584年の肇慶版(別名「山海輿地全図」と1600年の南京版(肇慶版の改版)は実在が確認されておらず、肇慶版は『月令広義』や『三才図会』に収録された『山海輿地全図』がこれに相当すると考えられている。また1603年には李応試版の『兩儀玄覽図』がある。リッチによる世界図の諸版については以下。船越昭生「坤輿万国全図と鎖国日本—世界的試圏の成立」『東方学報』41(京都大学人文科学研究所、1970年3月)、596-710頁。海野一隆「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」『東洋学報』87(東洋文庫、2005年6月)、101-143頁。

の中央に中国や日本を含む東アジア世界を据えた点が非常に大きな特徴と言える。中央経線は赤道の二分の一の長さで、緯線は赤道に平行した直線で表される。両極は赤道の二分の一の長さの線分で表現される。メガラニカを除いて、ほぼ正しい諸大陸の面積、形態を示していると考えられている。本図のほか左右両端にリッチ自身の序・跋が記され、枠外の四隅には天体図の九重天図、天地儀、南北の両半球図が挿入されている<sup>33</sup>。

底本は未だ明らかになってはいないものの複数と考えられており、前章で述べたオルテリウスの『世界の舞台』(1570年)やメルカトルによる世界図(1587年)、プランシウスの世界図(1590年)などがその候補とされている。また、西洋製世界図だけではなく、中国における地図や文献、例えば『皇明職方地図』、『広輿図』、『文献通考』、『疇海図編』などを参考にした可能性がこれまで指摘されている<sup>34</sup>。

本図の大きな特徴は先述のように東アジアを世界の中心に据えたことと、世界各地の地名を漢字で表記した点である。もちろんそれまで中国には独自の世界地図が存在しており、当然ながら漢字によって地名が記されていた。しかし、それらはリッチ自身が述懐しているように、中国のみが図中に巨大に据えられ、周辺諸国がごくわずかに記された程度の地図であった。一方『坤輿万国全図』はいわゆる大航海時代に伴って急激に発達した近代的な地理学の成果であり、なおかつ漢字によって表記されていることが画期的だったのである。

漢字で地名が記されていれば、同時代の日本人も読むことができたであろう。『坤輿万国全図』は17世紀半ばに日本に伝来し、版本からいくつかの写本が作られた。刊本は世界で4点確認されているが、そのうちヴァチカン教皇庁図書館所蔵品を

<sup>33</sup> 1602年版の『坤輿万国全図』の刊本は宮城県図書館蔵本が同図書館のウェブサイトで見ることが出来る(<http://eichi.library.pref.miyagi.jp/konyo/>)。また、同サイトでは後述する着色写本も閲覧可能である。

<sup>34</sup> 主要な先行研究としては船越昭生、海野一隆の掲書のほか以下がある。鮎沢信太郎『地理学史の研究』(愛日書院、1948年、復刻版原書房、1978)。高橋由貴彦「マテオ・リッチ『坤輿万国全図』記事の全訳(上)」『海事史研究』66(日本海事史学会、2009年12月)、69-92頁。高橋由貴彦「マテオ・リッチ『坤輿万国全図』記事の全訳(下)」『海事史研究』67(日本海事史学会、2010年12月)、86-105頁。

除く3点が日本に存在している。すなわち宮城県図書館、京都大学附属図書館、国立公文書館内閣文庫がそれぞれ所蔵するものである。さらに刊本をもとに様々な種類の写本が作られ、その数は日本に存在するだけでも20種を超えるという<sup>35</sup>。『坤輿万国全図』刊本は墨一色で刷られているが、写本作成の際には着色が施されたものもあり、日本製の写本の中には地名の一部が変更されたり、振り仮名が付されたものもある。

それでは具体的に『坤輿万国全図』の記載内容を検討してみよう。同図にはそれまでの世界地図に例を見ないほど細かな地名が漢字によって記載されており、それはインド亜大陸においても例外ではない。リッチは世界を亜細亜、南北亜墨利加、利未亜、欧羅巴、墨瓦蠟泥加という5つの部分に分けており、これがその後の世界認識にも影響を与えた五大州の概念の端緒である。先学によれば、それぞれの部分に記載される地名は全体で1100余りであり、大陸別の割合は亜細亜46%、南北亜墨利加が21%、利未亜が17%、欧羅巴13%、墨瓦蠟泥加が3%であるという<sup>36</sup>。地形は現在我々が見る世界地図に近い様相を呈しており、インド亜大陸として特定し得る形状の半島が描かれている。同図におけるインド亜大陸のどこまでを「インド」として抜粋するべきかどうかについては様々な意見があろうが、本稿では暫定的に付図のような形で抜き出してみた(表1)。その基準は西北に描かれたスレイマン山脈あるいはヒンドゥークシュ山脈と思しき山地、北部の「北高海」とそこから東に流れる河川の先にある蒲昌海、そして東は榜葛刺が記される海岸線から北部に複数の河川として記される安義河である。これらの地形によって区切られた領域に記載される地名は68であり、その他亜大陸全体を指していると思われる應帝亜の語がある。またユーラシア大陸に大きく記された「亜細亜」の「細」の文字が、亜大陸中央部に見られる。以下、これらの地名からいくつかを例にとって検討してみたい。

## 【天竺／てんじく②】

『坤輿万国全図』において天竺に直接関係する

地名は2つ存在する。「小天竺」と「西天竺」である。天竺という名称は西洋で作成されたアルファベット表記の世界地図には存在しなかったことは前にも述べた。『坤輿万国全図』は西洋人が漢字によって地名を記載した初めての世界地図であるため、当然ながら西洋人が天竺という言葉に記載した最初の地図だったとも言える。

まず小天竺だが、管見の限りこの地名について考証を行った先行研究はないように思われ、それゆえ現在に至るまで特定の地名に比定されていないのが現状である<sup>37</sup>。場所としては現在のインド亜大陸の東北部で、南北に走る山脈よりも東側に記されている。仏教的世界観における五天竺は、東西南北の天竺と中天竺であったが、小天竺という言葉は存在しなかった。

小天竺の解釈については未だ推測の域を出ないものの、いくつかの可能性が考えられる。まず1つ目は同じく『坤輿万国全図』に記載される大西洋、小西洋などという言葉における大小と同様の意味合いにおいて小天竺の「小」の文字を解釈する方法である。『坤輿万国全図』において「洋」と称される海洋は大東洋、小東洋、大西洋、小西洋の4つがある。東西の洋はもともと南海を両分する名称であり、宋元時代にはスマトラ北端を基準に東西が分けられ、明代中期には広東の南で区分されていた。ここで言う小西洋は西洋がさらに大小に区分され、中国に近い方を小西洋、遠い方を大西洋としたものであると考えられている<sup>38</sup>。東洋についても小東洋は日本列島のすぐ東、大東洋はアメリカ大陸の西側に記され、中国に近い方が小東洋、遠い方が大東洋となっている。小西洋はインド亜大陸の西側に記されており、小天竺の小も同様の意味の可能性がある。対義語としての「大天竺」なる語は見いだされないが、天竺のうち中国に近い側をあるいはこのように呼んだ可能性が考えられる。その場合、後述する「西天竺」が大天竺と対応することも考えられる。

<sup>35</sup> 川村『近世日本の世界像』、72頁。

<sup>36</sup> 船越「坤輿万国全図と鎖国日本—世界的試圏の成立」、654頁。

<sup>37</sup> 古賀慎也「ケンペルが持ち帰った『万国総界図』:『万国総界図』がヨーロッパ学会に与えた影響」『九州大学総合研究博物館研究報告』6(九州大学比較社会文化学府、2008年)、33-80頁において、同じく小天竺の記載がある『万国総界図』に関する地名比定を列挙しているが、小天竺に関しては比定地が明示されていない。

<sup>38</sup> 船越「坤輿万国全図と鎖国日本—世界的視圏の成立」、662頁。

2 番目の可能性であるが、卑近な例で言うと京都のような風情を残した町並みを「小京都」と呼ぶが如く、あたかも天竺であるかのような土地を憧憬の念を込めてこのように呼んだというものである。現在の中国でも成都に小天竺と呼ばれる通りがあり、これとは別に 16 世紀の浙江省には小天竺と呼ばれた役人の別荘地があったという。『坤輿万国全図』におけるインド亜大陸の地名は、ヨーロッパ人が呼んだ地名を音写したものと、中国で元来用いられていたものが流用されているものの 2 種類がある。インド亜大陸においては中国と物理的な距離が近いこともあって図中のインド亜大陸の東北に記される地名ほど中国語からの流用が多い印象を受ける。また、天竺という言葉自体がそれまでヨーロッパ世界には知られていなかった概念だと考えられるため、小天竺もまた中国における地理概念が流用されている可能性が高いだろう。

3 番目の可能性としては、いわゆる India Major/Minor の概念である。ヨーロッパ世界におけるインドという概念は時代が下るにつれて変化し、「複数のインド」が登場するようになった。4 世紀に遡るとされる India Major/ Minor もその 1 つである。このうち India Minor はカステリヤ王国の外交官であったルイ・ゴンザレス・クラビホ (? ~ 1412) が 15 世紀初頭の『ティムール帝国紀行』においても言及しており、この場合はアフガニスタンに比定されるように思われる<sup>39</sup>。ただこの場合、リッチが Minor を小と訳すのはいいとしても、India を天竺と訳したというのは若干の無理がある。というのは後述するように、リッチは India を應帝亜と訳していたと思われるからである。また、Major に相当するであろう「大天竺」も図中には見られない。

このように小天竺については未だ原拠となる直接の語を見出すことは出来なかったが、この語が後代の地図と天竺認識に少なからぬ影響を与えたであろう可能性については後述する。

次に西天竺についてであるが、この用語は五天竺の中の西天竺だと思われる。ただ、問題なのはその他、つまり東、南、北、中の天竺が記載されていない点である。別稿で触れたことがあるが、

近世日本の地誌などにおいて五天竺が地名として使用される場合、東西南北の天竺、そして中天竺すべてに言及される場合は少なく、南天竺、西天竺、東天竺の使用が他の 2 つに比べて圧倒的に多い<sup>40</sup>。このうち南天竺は本来の意味とは異なり、東南アジアから南アジア地域を広く包括する日本独特の概念として用いられ、東天竺は次第に東印度、さらには榜葛刺すなわちベンガルと同一視されていく。一方の西天竺は時代が下って 18 世紀初頭に西川如見が記した『増補華夷通商考』などにおいては例えば波斯（ペルシャ）のように現在の西アジアの地名を指す場合に用いられることが多い<sup>41</sup>。

南蛮世界図屏風のうち江戸時代初期に作製されたものの中にはインド亜大陸北部に天竺と記された例もあることから考え合わせると、17 世紀初頭から半ばの間に、天竺はインド亜大陸と結び付けられるようになったと考えられる。そして、『坤輿万国全図』に記載された「小天竺」と「西天竺」における「天竺」の文字は天竺と亜大陸の結合に関して大きな役割を果たしたと思われる。

#### 【いんぢあ／應帝亜／India、印度廝當／Indostan】

一方、『坤輿万国全図』には「應帝亜」「印度廝當」との記載がある。これらはそれぞれ India、Indostan からの音写であると思われ、両者ともにいわゆる「インド」の総称であるが、双方が同時に記載されている。つまり、いわゆる「インド」を意味する地名が 2 つ同時に存在しており、なおかつ記載方法が異なっているのである。順番に見てみよう。

まず應帝亜は亜大陸の南部に大きく縦書きで記されている。山本氏図にみた「いんぢあ」はやはり India から平仮名への音写だと考えられる。つまり、India と記載された何らかの地図から山本氏図を作成した何ものかは「いんぢあ」と音写し、リッチは「應帝亜」と音写したのだと考える。もちろん、それぞれが依拠した原図は異なるであろうから、あくまで India との記載から音写したと

<sup>40</sup> 石崎貴比古「五天竺におけるインド認識」『印度學仏教學研究』60(1)(日本印度學仏教學会、2011 年 12 月)、558-555 頁。

<sup>41</sup> 『西遊記』において「西天」と記されるような、玄奘が目指した天竺、つまり中国から見た西に存在する天竺という意味における用法もある。

<sup>39</sup> Henry Yule and A. C. Burnell, *Hobson Jobson: The Anglo-Indian Dictionary*. (Wordsworth, 1996), 433-436.

いう意味でのことである。この應帝亜に関しては亜大陸西部に記された「小西洋」との地名のさらに西に以下のような説明文が付されている。

應帝亜總名也中國所呼小西洋以應多江爲名一半在安義江内一半在安義江外天下之寶石寶貨自是地出細布金銀椒料木香乳香藥材青朱等無所不有故四時有西東海商在此交易人生黑色弱順其南方少穿衣無紙以樹葉寫書用鐵維當筆其國王及其各處言語不一以椰子爲酒五穀惟米爲多諸國之王皆不世及以姉妹之子爲嗣其親子給祿自瞻而已。

文意は以下である。

應帝亜（いまのインド）は総名であり、中国は小西洋と呼ぶ。應多江（インダス河）から名づけられた。半分は安義江（ガンジス河）内にあり、半分は安義江の外にある。世界の宝石宝物はこの地より出る。細布金銀椒料木香乳香薬材青朱など一つとしてないことがないので、常に東西の海商が集まって交易する。人は生れながら色黒くおとなしくてすなお。南の方の人はあまり衣服を着ない。紙はなく、木の葉を利用して書き、筆には鉄錐を用いる。国王も言語も所によって異なり、一つではない。酒は椰子で造られ、五穀の中、米だけが多い。諸国の王は世襲ではなく、姉妹の子が嗣ぐ。王の子はただ俸祿で暮らす<sup>42</sup>。

この記述からいくつかの点が指摘し得る。まず、應帝亜とは「総名」であると記され、これは應多江から名付けられたという点である。應帝亜は中国語でYingdeyaと読まれ、Indiaを音写した言葉だと考えられる。Indiaはヨーロッパ世界において、古くからよく知られた地名であった。その語源は現在のインダス河を意味するSindhに起因し、ペルシャ、ギリシャと西伝するにつれてHindh、Hind、Induとして変化し、ギリシャ語ではIndo、ラテン語ではIndusなどと表記され、Indiaとの名称が定着した<sup>43</sup>。そのため大航海時代のヨーロッパ人が目指したのはIndoあるいはIndiaであったのだが、当

然ながらインド亜大陸には様々な都市が存在し、それぞれ固有の名称を有していたことは言うまでもない。そのため当時作成された地図にはヨーロッパ人によって確認された細かな地名が次々と記載されたわけであるが、彼らが到達したインド亜大陸の総体としての名前はそれまで通りIndiaと呼ばれた。リッチがここに記したのは、ヨーロッパ人にとってのIndiaを『坤輿万国全図』を見る人に向けて記したものだと言える。その際、印度ではなく應帝亜を用いたのは、中国における呼称よりもリッチ自身が用いた呼び名を優先し、なおかつ音写して用いたからだとも考えられるし、また印度と應帝亜が本来同じ場所を意味する異なる名称だとは認識されなかったかもしれない。

ちなみにこの説明文のうち「半分は安義江（ガンジス河）内にあり、半分は安義江の外にある」との記述は先述したIndia Intra / Extra Gangemを念頭に置いたものと思われる。古来ヨーロッパ世界において、インドはガンジス川よりも西側、すなわちヨーロッパから見て内側であるIndia Intra Gangemと、東＝外側であるIndia Extra Gangemとに二分して認識されていた<sup>44</sup>。この記述は比較的后代まで踏襲されている場合もあり、東南アジアも含めてIndia Extra Gangemとみなしているように思われる地図も存在する。

一方の印度廝當はIndostanの音写であろう。Stanとは周知のように「国」を意味するペルシャ語の接尾辞であり、直訳すれば「Indoの国」とでも言うべき意味になる。そのためインドに対するペルシャ側、あるいはイスラム側からの呼称を音写したものが、同様の意味である應帝亜などと併存しているため、情報が錯綜しているような印象を受ける。ただし、写本の中にはこの文字に「インテア」との振り仮名を付すものもある。これは恐らく、リッチが印度廝當をIndostanからの音訳として記したものを知らない人物で、亜大陸のどこかに「インテア」と発音すべき地名があることを知り、どういうわけかここに記してしまったのであろう。本来「インテア」と振り仮名を付すべきなのは應帝亜の方であるのは言うまでもない。

以上の考察から次のようなことが言える。第一にリッチ図における天竺あるいはインドの表現は異なる情報源における「複数のインド」が混在し

<sup>42</sup> 高橋「マテオ・リッチ『坤輿万国全圖』記事の全訳(上)」、79頁。

<sup>43</sup> Henry Yule and A. C. Burnell, *Hobson Jobson The Anglo-Indian Dictionary*. 433-436.

<sup>44</sup> 重松伸司『マドラス物語』（中央公論社、1993年）。

ている。小天竺／西天竺は直接の史料こそ未だ詳らかではないが、中国側から見たインドへの呼称であることは明らかである。また、應帝垂はヨーロッパ側から見たインドに対する総称であった。そして印度斯坦は *Indostan* の音写であるため、ペルシャ側からのインドの名称だと考えられる。このように『坤輿万国全図』には中国、ヨーロッパ、ペルシャという異なる三つの視座からの呼称が混在、併存していると言える。それらはいずれも、現在インドと呼ばれる地域を異なる方向から表象した際に浮かび上がった像であり、その性質はそれぞれに異なる。リッチがそれぞれの語源や由来を承知していたかどうかは今後の精査が不可欠ではあるが、これらが混在していることが、その後登場する地図や地誌におけるインドに関する情報が錯綜している淵源の一つであり、また当時最高峰の精度を誇ったリッチ図の限界だとも言えるだろう。

## 5. 日本初の刊行世界地図と天竺の「復活」

1639（寛永 16）年に完成したいわゆる「鎖国」によってポルトガル人の来航が完全に断たれ、中国とオランダのみが、長崎一港で交易を許されることになった。そのため、世界図を含む海外知識の流入は非常に限られたものとなったことは言うまでもない。しかしながら、これまで見てきたような世界地理に関する情報の蓄積と、限定されつつも流入し続けた知識によって日本で初めての刊行世界地図が鎖国の完成直後に誕生することになった。これが 1645 年（正保 2）に長崎で出版された『万国総図』である（図 4）。

縦 132 センチメートル、横 58 センチメートルの世界図に加え、同じ大きさの世界人物図が付属しているのが特徴的である。世界人物図とは世界各地の民族を絵入で列挙した図であり、その人数や内容に相違はあるが、江戸時代を通じて描かれ続けた種類のものである。世界図、人物図双方とも現存するのは下関市立長府博物館所蔵の 1 点のみだが、片方が欠けるものや模写本などを含めると、同系の図は 10 点ほど現存するとされる<sup>45</sup>。

『万国総図』は東を上、西を下向きに縦長に描く特異な構図で描かれており、これは本来掛軸用として作られたものだと考えられている。図の外

型は『坤輿万国全図』などと同様に卵形であり、外枠と赤道、中央経線は白黒二色の線によって描かれる。図の枠外には日本船、大明船、なんばん船、おらんだ船の図が記され、地図自体も地域を色分けするかのようになり、複数の色によって着色されている。図中に記載される序文の内容から正保 2 年に長崎で開板されたことが判明しているが、未だ作者は明らかではない。図中の地名は印刷されたものと墨書されたものの 2 種類があるが、これは墨書地名を得てはじめて完成品となる白地図だったからだという説がある<sup>46</sup>。

記載地名は『坤輿万国全図』に比べるとかなり少ない。インド亜大陸に記された記載内容を検討してみると、陸地の大部分が着色されておらず、他の地形と同様に赤色で海岸線が縁取りされている。中央に印刷された「阿志や」（アジア）の文字があり、北からバラミ、シタウ、インヂア、かなりん、チャウル、カスタ、マカバル、こ阿（ゴア）、コチン、そしてセイランで合計 11 の地名が記載される。

一見して分かるように『万国総図』には天竺は記載されていない。先に見た『坤輿万国全図』には小天竺、西天竺という形ではあったにせよ、天竺という語が記載されており、このことは例えばオルテリウスの『世界の舞台』のような西洋起源の世界地図に天竺が存在しないことを知った人々に、ある種の安堵を与えたものと考えられる。三国世界観という枠組みで世界を認識していた当時の日本人にとって、天竺は世界にとって必要不可欠な構成要素であり、むしろ世界の大部分でなくてはならない存在だった。『坤輿万国全図』を見ることによって、彼らは天竺の「確かな場所」を特定することが出来たのである。それでは何故、日本で初めて刊行された『万国総図』には、天竺が記載されていないのであろうか。

この中の「阿志や」は言うまでもなくアジアであり、えうろば、あひりか、あめりかと同様に黒字に白抜きの枠で記されているところを見ると、五大州の観念が意識されていると思われる。ただ

<sup>45</sup> 海野一隆「正保刊『万国総図』の成立と流布」有坂隆道編『日本洋学史の研究 10』（創元社、1991 年）、9-75 頁。海野は『万国総図』は当時の著名な測量家だった小林謙貞が作成に関わっていた可能性があり、対になった人物図とともに学習を兼ねた卒業制作に使われることを念頭に置いた刊行物だと論じている。

<sup>46</sup> 川村『近世日本の世界像』、85 頁。

し『坤輿万国全図』に見られた亜細亜などという漢字表記ではなく、仮名表記となっている。『万国総図』はその卵形の地形から一般にリッチ系世界図として分類されることも多いが、近年の研究によれば『坤輿万国全図』よりも南蛮世界図屏風のほうがより近親の関係にあると考えられている<sup>47</sup>。『坤輿万国全図』がすべて漢字表記であるのに対して『万国総図』が漢字表記と仮名表記が混ざっているのは、原拠となった地図が複数あったからであろう。仮名表記による地名は本来欧文による表記だったことが考えられ、中国における地名などは従来から日本で知られた漢字表記を用いたために、このような姿になったものと思われる。『万国総図』における中国には大明をはじめ四川、北京、陝西など漢字による地名が記載されており、原図も漢字表記だったものと思われるが、インド亜大陸の地名はいずれも欧文による原図をもとにしてきたことが想像される。欧文による世界地図であればオルテリウスの『世界の舞台』に見たように天竺が記載されていないのは当然のなりゆきであった。『万国総図』に天竺が存在しないのは、天竺を記載すべき地域の原図が欧文表記のものだったからだと考えられる。また『万国総図』には先に見た山本氏図と同様に亜大陸にインディアが表記されており、やはりIndiaとの表記がなされている地図を典拠としたものと思われる。

次に一方の世界人物図に目を向けてみよう。この図には日本、大明といった東アジアの地名から「ろそん」、「しゃは」などの東南アジア、さらに「せるまにや」、「いんけれす」などのヨーロッパの国々など、合計40の国々と、そこに住んでいるとされる民族が絵によって紹介されている。このうち地図上のインド亜大陸に表記されている地名と同名の「人物」、すなわちインド亜大陸に住んでいると考えられていた人物は、「まかばる」と「かなりん」である。いずれも肌の浅黒い男女が一对で描かれている点では同様だが、服装と持ち物が若干異なっている。

まず、「まかばる」とはマラバールのことと考えられ、地図中ではインド亜大陸の西側、マラバール海岸沿いに地名が記されている。「まかばる」の

男性は白色でひだのない腰布をまとっており、左手には大振りのナイフのようなものを持っている。彼は向かって左側に立つ女性の方を向いて布袋のようなものを差出しているように見える。頭髪を大きな髷に結っており、口髭を生やしている。女性のほうは朱色の布を左肩からゆるやかにかけており、これを右側の腰あたりで結び、後ろに流している。下半身は薄桃色のひだのある半ズボン、あるいはキュロットのようなものを履いており、頭髪は長くややウェーブがかっている。男女双方とも裸足である。

一方の「かなりん」はCanarinと思われ、現在のカナラあるいは現在のカルナータカ地方の人々と思われる<sup>48</sup>。「かなりん」の人々はやはり男女とも浅黒い肌の裸足の人物として描かれている。向かって左側に書かれた男性はややひだのある白い腰布のみを身に付け、左手で身長ほどの長さの槍、右手で布のようなものを持っている。頭髪は「まかばる」の男性よりも短く、アフロヘアーのような縮れ毛として描かれているようである。女性は「まかばる」と類似しているが、衣服は上半身の長い布のみで下半身は何もつけていない。「まかばる」の女性が左肩から布をかけていたのに対し、左右からマントのように流している。

このように『万国総図』と人物図によって現在インド亜大陸と呼ばれている地域に、このような風貌の人々が住んでいることが認識されるようになった。ここに記した「まかばる」と「かなりん」の「人物」のイメージは地名の表記こそ相違があるものの、後代まで継承されていったと考えられる<sup>49</sup>。

『万国総図』の刊行後、様々な形の模倣図が登場するようになった。菱川師宣門下の浮世絵師として有名な石川流宣が描いた『万国総界図』(1688年初版)は『万国総図』の模倣図の中で、後代への影響が最も大きかったものとされる(図5)<sup>50</sup>。『万国総界図』は東を北にして掛軸上に縦長の構図で描くという基本的な外形は『万国総図』を踏襲

<sup>48</sup> Henry Yule and A. C. Burnell, *Hobson Jobson: The Anglo-Indian Dictionary*. 154.

<sup>49</sup> 例えば西川如見の『四十二国人物図説』にも「加拿林(カナリン)」の人物が記載されており、その描写は『万国総図』付属の人物図の影響が認められる。

<sup>50</sup> 京都大学大学院文学研究科地理学研究室ほか編『地図出版の四百年—京都・日本・世界—』(ナカニシヤ出版、2007年)。

<sup>47</sup> 三好唯義『『三国』から『五大洲』へ』荒野泰典ほか編『日本の対外関係6 近世的世界の成熟』(吉川弘文館、2010年)、172-187頁。

しているが、海岸線や地形の描写など細部においては大きな劣化が見られる。そして地名の多くは『万国総図』には見られないものであり、むしろほとんどが『坤輿万国全図』に記載された地名である。近年の研究では『万国総界図』は『万国総図』のみを典拠としたものではなく、『坤輿万国全図』の簡易版を転載した『明清閩記』や『方輿勝略』などからの影響が指摘されている<sup>51</sup>。

亜大陸に記載された地名でまず目を引くのが、半島状に細長く描出された陸地の中央に見られる小天竺の文字である。これは疑いなく『坤輿万国全図』における小天竺の転載だと思われる。しかし、亜大陸と中国との境に一地方名のような形で小天竺が記載されていた『万国総図』に比して、『万国総界図』における小天竺は日本、大清、韃靼國、紅毛といった国々に匹敵する大きさで記載されている。これらの国々がいずれも四角形の外枠で囲われていることから考えて、小天竺は一地方名ではなく「一つの大国」として捉えられているものと考えられ、白色で表現されたインド亜大陸と思しき地形全体を意味しているであろうことが指摘され得る。

『万国総図』におけるインド亜大陸のうち、南側の白色で区別された部分はほぼ現在で言うインド国内に相当する地名が記載されており、その北方の茶色で区別された地方は、コラサン、アラクと言った地名が記されているのみであった。しかし『万国総界図』における亜大陸がある種異様に見えるのは、小天竺よりも北側、コラサン、アラクの南側に見られるいくつかの漢字表記による地名のためである。例えば小天竺のすぐ北に記される鐵門関は古代シルクロードの関所として知られる場所であり、本来あるべき位置よりもかなり西南寄りに記されている。この鐵門関から北部、コラサンからアラクあたりまでの漢字地名はいずれも西域関連のものと考えられる。これは玄奘などに見られるように中国からインドへ赴く際に、西域を経由した路程が記憶され、そのために天竺と近しい形で記載されてしまったものだと考えられる。

『万国総界図』の下部分には主要な地名が列記され、日本からの距離や方位が示されている。右

半分にはオランダとルビが付された紅毛の壹万二千五百里から始まり、距離が長い順にジャガタラ、暹羅、鈍京、漢埔寨、交趾、呂宋、東京、天川、泉州、大宛、福州、南京、琉球の14か国が各国までの距離とともに列記されている。一方左半分には大清、東京、北京、小天竺、ジャガタラ、暹羅、朝鮮、韃靼、阿蘭陀、大宛島、琉球の11の地名とそれぞれの方角が記されている。小天竺は日本にとって戌亥の方向に位置することが明記されており、そこには「コテンジク」という振り仮名が付されていることが分かる。興味深いのは左半分の国々において東京、北京は大清の、そしてジャガタラ、暹羅は小天竺の下位概念のような形で記されている点である。地図上ではジャガタラ、暹羅はいずれも東南アジアに記されており、小天竺とは無関係のように見える。それなのに各国の一覧においてこの2つの地名が小天竺と結びついているのは、ジャガタラ、暹羅がいずれも「天竺」という大きな概念に包括されるものとして、それまでも想起されてきたからだと考えられる。このことは先に見た山田長政の文脈において暹羅と天竺が同一視されていたこととも無関係ではないだろうし、東南アジア海域がこの後一般的に「南天竺」と称されていったこととも密接な関連性があると思われる。

『坤輿万国全図』における小天竺は、他の地名の文字の大きさなどから考えて、あくまで一つの地域名に過ぎず、應帝亜や亜細亜のように複数の地域を包括する名称ではなかった。ところが『万国総界図』において「小天竺」は直接の原図の一つであろう『万国総図』には存在しなかったものを復活させ、なおかつ国名と呼んでも差し支えない名称に格上げされている。このことは日本人にとっての天竺の重要性、必要性を如実に物語っているとさえ言えないだろうか。

また『万国総界図』には小天竺とは別に西天竺国との名称も見られる。こちらもやはり『万国総図』には見られない地名であり、小天竺と西天竺国2つが同時に記載されているということは、やはり亜大陸部分の記載に関しては、『坤輿万国全図』が大きな影響力を持っていたことがうかがえる。

『万国総界図』に見られる天竺を強調するような表現は、その後日本人の世界認識に大きな影響を与えた書物にも踏襲されていった。西川如見の

<sup>51</sup> 青山宏夫『前近代地図の空間と知』（校倉書房、2007年）。

『増補華夷通商考』(1708年)がその代表例である。同書に所載される「地球万国一覽之図」(は五大州の記載が見られることからリッチ系世界図に分類され、『坤輿万国全図』の影響が見られるとされている。しかし、『坤輿万国全図』における小天竺と西天竺という表現ではなく、「天竺」として亜大陸より少し北東のチベットあたりに大きく記されている。

『増補華夷通商考』の本文には全部で98か国の地誌とそこに住む人々の特徴が記されている。この98か国の中には天竺という項目はないものの、各国の説明の中で天竺という言葉が多用されている。例えば占城、柬埔寨、暹羅、インデヤなどの国々はいずれも「南天竺」のうちにあるという形で説明される。つまり天竺は一つの国ではなく、複数の国々を包括する概念として使用されている。また、もう1つ重要なのは、如見は天竺をアジアの下位概念として位置付けようとしている面がある点である。「地球万国一覽之図」を見ても一国の地名というよりも漠然とした場所を示しているように見える。そして「地球万国一覽之図」では天竺とアジアが併存していることも注目していいだろう。三国世界観における天竺と五大州におけるアジアという異なる世界観における地名はどちらか一方が残るのではなく、当初は双方が同時に記載されていたのである。

## 6. おわりに

本稿の考察から、16世紀末から18世紀初頭の世界地図における天竺の表現についてまとめると次のようになる。

まずオルテリウスの『世界の舞台』に見たように、西洋人が作成した世界図には天竺という言葉は存在しなかった。そしてそのような西洋起源の原図をもとに作成されたと考えられる山本氏図では、天竺が世界図上に記されたものの、記載場所はインド亜大陸ではなく、タイ付近であった。この事例から、天竺の該当地が当初からインド亜大陸だったわけではないことが明らかになった。そしてマテオ・リッチの『坤輿万国全図』の出版前後の時期に、亜細亜や亜墨利加といった五大州の観念が導入され、同時に天竺は現在我々がインドと呼ぶ場所に同定されるようになっていく。このことは『坤輿万国全図』に記載された小天竺や西

天竺という存在が、何らかの形で影響したものと考えられる。その証拠に『坤輿万国全図』を原図としたと思われる『万国総界図』では、インド亜大陸に小天竺と西天竺が記載されていた。一方、『万国総界図』はこれに先んじて出版された『万国総図』の普及図であると考えられてきたが、『万国総図』では天竺の記載はみられなかった。このことから『万国総図』は『坤輿万国全図』以外の原図からインド亜大陸を描いたものと考えられる。

この考察の結果から明らかになるのは次の2点である。①天竺はインドの旧称ではなく、本来はあくまで仏教の祖国を意味する言葉であり、それが次第にインドへと同定されていった点。つまり、インドの名称が天竺という旧称からインドという新しい名称へと変化したという認識は事実とは異なると思われる。②『万国総図』と『万国総界図』の差異から明らかなように、江戸時代の日本人にとって天竺は世界にとってなくてはならぬ存在であり、意識的に世界地図上で強調されるようになっていったと思われる点である。

江戸時代後期には高橋景保が作成した官選の世界地図『新訂万国全図』(1810年)や、蘭学者箕作省吾による『新製輿地全図』(1844年)などのように、次第に天竺を記載しない世界図が再び作成されるようになる。しかし、このような知識人による世界地図から天竺が姿を消していく一方、民衆向けの通俗的な世界図においては幕末まで天竺の記載が存続する。天竺という語は仏教の祖国という意味合いから、三国世界観の一端へと変化し、本朝と中国以外すべてを包括する「異国そのもの」とでもいうべきものを示す概念として発展したと考えられる。来航したポルトガル人宣教師はそれゆえ「異国≒天竺」からやって来た人々と称された。いわゆる「鎖国」が整えられるまで日本列島には海外から様々な種類の人や物が往来し、天竺という言葉によって説明されねばならない事象が増加していったと考えられる。そのため、異国との交渉が盛んになればなるほど、天竺として表象される場所は拡大していったのではないだろうか。しかしながら「鎖国」によって物理的な交渉が再び制限されると、天竺と呼んだシャムなどの具体的な地域との交渉史は忘れられ、『天竺徳兵衛』の物語に代表されるような、非現実的な脚色が行われるようになっていったのだと思われる。通俗

## 110 世界図に見る「天竺」認識に関する一考察

的な世界図において天竺の記載が存続したのは「鎖国」という状況下での情報の制限を想像力と記憶によって補おうとした結果だったのではないだろうか。本稿ではこれらのことまで詳しく検討する余裕はなかったが、今後は江戸時代全体での天竺の表現の変遷をさらに考察する必要があると考える。

(いしざき たかひこ・東京外国語大学大学院博士後期課程)



図1、「五天竺図」(甲本)法隆寺蔵  
奈良国立博物館・朝日新聞社編『天竺へ 三蔵法師3万キロの旅』(奈良国立博物館・朝日新聞社、2011年)、192頁より。



図2、「世界全図 (TYPVS ORBIS TERRARVM)」  
オルテリウス『世界地図帳—ライデン大学図書館蔵—』(臨川書店、1991年)より部分的に抜粋。

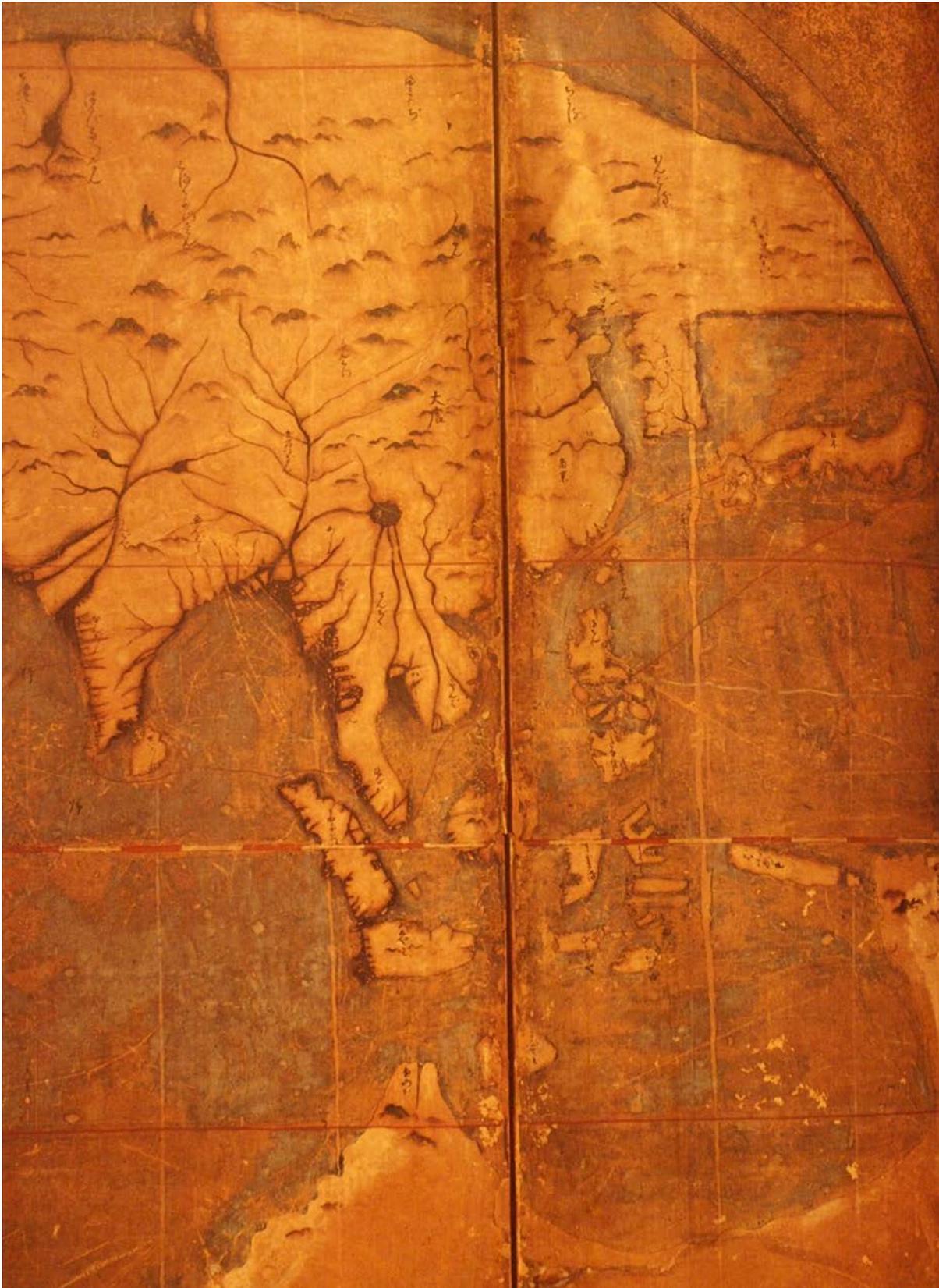


図3、「世界図」山本久蔵  
織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成世界図編』（講談社、1975年）、69頁より部分的に抜粋



図4、『万国総図』下関市立長府博物館蔵より部分的に抜粋。



図5、『万国総図』神戸市立博物館蔵より部分的に抜粋。

|     |     |      |     |      |          |       |      |      |      |      |      |       |     |       |     |
|-----|-----|------|-----|------|----------|-------|------|------|------|------|------|-------|-----|-------|-----|
|     |     |      |     |      |          | 私大蠟   |      |      |      |      |      | 何加入   | 打喇巴 |       |     |
|     |     |      |     | 加私   | 得力利大伯里私且 |       | 回回   |      |      |      | 耶塞援  | 大革里思且 | 淡善土 | 貌力南客尔 | 海昌蒲 |
|     | 波斯  | 亜的伯讓 | 色禰利 |      |          |       |      |      | 闊悉多  | 喝盤陀  | 地布蠟  | 朱俱波   | 大葱嶺 |       | 干闥  |
| 沙勿私 |     |      |     | 惹西斯突 |          | 鐵門闕   | 觀貨羅  |      |      | 山婆葛高 |      | 細     |     |       |     |
|     |     |      |     |      | 甘打喝      | 伊西帝宜入 |      |      |      | 懸度山  | 小天竺  | 伐刺弩   |     |       |     |
|     | 溪尔曼 | 赤蠟蓋亞 |     | 哥蠟作泥 | 身毒河      | 梧作刺得  | 葛步尔  | 莫臥尔  | 菽羅   | 葛刺尔  | 加尔且且 | 詔納僕兒  |     |       |     |
|     |     |      |     |      |          | 吳茶蠟   | 西天竺國 | 印度斯當 |      |      | 孟道   | 亜蠟敢   |     |       |     |
|     |     |      |     |      |          | 丟     | 替夷巴坎 |      |      | 何里沙  |      |       | 榜葛刺 |       |     |
|     |     |      |     |      |          | 也利客   | 利兀尔  | 巴辣瓦得 | 阿利沙彈 |      |      |       |     |       |     |
|     |     |      |     |      |          |       |      | 應    |      |      |      |       |     |       |     |
|     |     |      |     |      |          |       | 伊達尔幹 |      | 毘私那亞 |      |      |       |     |       |     |
|     |     |      |     |      |          | 臥亞    |      | 帝    | 斯襍羅巴 |      |      |       |     |       |     |
|     |     |      |     |      |          | 葛正    |      | 麻辣襍尔 | 那心瓦國 |      |      |       |     |       |     |
|     |     |      |     |      |          | 哥爛    |      | 亞    |      |      |      |       |     |       |     |
|     |     |      |     | 萬島   |          |       |      |      |      | 錫狼島  |      |       |     |       |     |

表 1 『坤輿万国全図』におけるインド亜大陸に記載される地名